

〔書評〕

冲永宜司 著

『心の形而上学——ジェイムズ哲学とその可能性——』

井 上 克 人

心は万境に随って転ず、
転処実我能く幽なり。
流に随うて性を認得すれば、
喜びもなく亦憂ひもなし。

本書を読み進めていくうちに、ふと脳裏に浮かんだのがこの句である。これは『臨濟録』（示衆一九之四）のなかに引用されている西天二十二祖摩拏羅尊者の伝法偈である。『流に随う』とは、無神経になれということではない。喜びも憂いもその実体はないということ、言い換えれば「万境に随って」心を転じ、喜ぶときには喜び、憂うるときには憂うという、そのことになりきったところ、そこにこそ心の本体があるというのである。じつはこの句は、西田幾

多郎が「思索と体験」のなかで、ベルクソンの純粹持続の考えに共感し、それを紹介する文章に出てくる。「種別的であつて何時でも一つである意識の変化は不断連続でなければならぬ、換言すれば連続的進行でなければならぬ。この言語思慮を絶し、禪家の所謂へ心随万境転、転処実能幽」といった様な所が赤裸々たる経験の真相である、自己の本体である、ベルクソンは之を純粹持続又は内面的持続と名づけるのである」と。西田は、明治四〇年前後、ベルクソンとともにジェイムズにも最も親近感をいだいていた。彼らは、抽象以前の具体的で生き生きとしたありのままの経験を出发点とする立場を共有していたのである。

W・ジェイムズ（一八四二—一九一〇年）といえは、哲学史のなかでは「デューイとともに『アメリカ哲学』で

あるプラグマティズムに数え上げられる一人だが、当時の日本哲学界の重鎮であった東大教授の桑木厳翼は、ドイツ観念論哲学こそが哲学の典型であるとし、プラグマティズムは「偽哲学」に過ぎずとして排斥したが、当時、金沢の四高にいた西田幾多郎はジェイムズの哲学思想にいたく感心し、そこに新たな哲学の生命を感じ取っていた。当時の彼の日記にはこうある。「ゼームスの Varieties of real Experiences (宗教経験の諸相)」といふ書物を借りてよみ始めた。(明治三七(一九〇四)年一月八日)「ゼームス氏が哲学研究に転じたりときく。この人哲学を研究せは定めし面白からんと信す。(明治三八(一九〇五)年七月三日)「午後、ゼームスをよむ。心理を之によりて講せんと思ふ。(明治三八年十月四日)そして、明治三九(一九〇六)年、西田は、当時在米中の親友鈴木大拙に宛てて、次のような書簡を送っている。「近来 W. James 氏などの Pure experience (純粹経験) の説は余程面白いと思ふ。氏は Metaphysics (形而上学) をかくといふがまだ出来上らぬか。」

その翌年の明治四〇(一九〇七)年に、「善の研究」の中心をなす「實在に就いて」という論文が『哲学雑誌』(第二四一号)に掲載され、かなりの反響を呼び、西田の

存在が初めて日本哲学界の注目をあびる。そして明治四一(一九〇八)年には同書の第一編をなす「純粹経験と思维、意志、及び知的直観」という論文が同じく『哲学雑誌』に発表され、西田はそこでしばしばジェイムズに言及している。明治四〇(一九〇七)年当時、わが国では「實在論」の研究が盛んに行われ、そうした實在論を歓迎する風潮の中で西田幾多郎が注目を引くようになったのである。

前置きが長くなってしまったが、それにはそれなりの理由がある。本書「心の形而上学」もそのタイトルが示すように、「私」とは誰か、真の「實在」はどこに求めるべきかといった、極めて形而上学的なテーマを真摯に扱った学術書であって、そうした本書が、二〇〇七年度の日本宗教学会の学会賞および日本倫理学会「和辻賞」を受賞したことは快挙と言わざるをえない。西田の「實在論」が当時絶賛を博したことと重ね合わされると同時に、当時ジェイムズの哲学に関心を寄せていた西田の思惟をそのまま引き継ぎ、著者なりの思索を深めていったところに本書の特色があると言えよう。

以下、紙幅の関係上、各章ごとに順を追って解説することとは差し控え、もっぱら評者の関心に即して著者の論述を適宜掻い摘まんで追っていきたい。

本書の中心的なテーマは、ジェイムズの哲学にどこまでも踏みとどまりながら、反省的思考では捉えられない非実体的な「心」の正体を追求することであり、同時に、対象論理的思考では追いつき得ない経験の直接性に真の實在を求めようとするところにある。非実体的な「私」は、「實在」の生き生きと流れる経験の直接性の内奥に潜んでおり、観念的抽象化によらずにそれをそのまま際立たせようとしたのがジェイムズであった。フッサールもそうであったように、自我を対象化せぬまま、自我の作用のままにおいて自分自身を知る何かの仕方が考えられ、その単純な部分は「シャスネス」(sciousness)の流れと呼ばれるのだが、そこはまさに「主客未分」の状態である。

ジェイムズは「根本的経験論」において、「流れ」を實在一般の性質と看做す。そうした流れから出発する経験論的方法は、非対象的な領域に迫りながらも、流れを対象として観察、分析するのではなく、自己が流れそのものになりきるところから得られる直観を容認しようとする。そこで目指されるのは、「考えることそれ自体の過程に直接的に気づくこと」である。従って、自我の根源領域という対象化不可能なものについての究明に関しては、直接的な気づきとその記述との間に乖離の危険性があるものの、自我

それ自体をさらに内側から照射する道筋は可能となるのである。ジェイムズにあつて、経験の流れは最も生き生きとした直接的なものとして扱われるが、それは明証的な自我を前提にしてそこから導き出されるのではなく、そうした明確な自我がなくてもその實在性を獲得し得るのである。ところで、本書で特筆すべき点のひとつは、従来わが国ではほとんど見られなかったジェイムズの「自己」(self)論に着目したことである。この議論は、「私」が「私」でなくなる事態の分析を通じて、逆に、普段「私」を「私」だと思わせているものの正体について問い直す方法を探っている。つまりこの「私」を生じさせているもの、「私」を発生させているものに関して根源的な反省を要求することを通じて、経験の實在性の根源、および純粹自我に関する形而上学の問題を突きつけるのだ、と指摘する。

では「私」の「私」たり得る根拠とは何か。ジェイムズは絶え間ない流動と運動の中にある諸観念と知覚のつながりに「實在性」を認め、そこに主我意識の根拠を見出す。このつながりは「暖かさ」と親しさの感觸だとされる。「私の経験」とは、ほかならぬこの感觸なのであって、この「私の身体という重い暖かい塊」と「親しさのある活動感」とを伴った内容が過去の経験として蓄積され、しかも

この感触に経験全体への求心的な重力のように機能する部分が形成され、それが「それ自身の存在を感じ取る」瞬間となることで、「私たちの人格的同一性の本当の核」が生じてゆくという。

ジェイムズにとって、「私」つまり個我のないことは消極的意義のみを持つことはなく、むしろ「私」がなくなるという事態の中に、生の積極的な意義を見出そうとする面さえあった。後の「宗教経験の諸相」では、ある種の宗教経験は自我が覆される様々な形態であるとして説明され、「私」の実体性より、「私」が消去されるという事態と密接なものであった。

本書の圧巻は第三部の宗教哲学であろう。宗教とは古い自我の転覆と、新たな自己確立の徹底が貫かれることであり、その体験のリアリティーが根源的であることなのである。著者によれば、ニヒリズム克服は、虚無にさらされながらもその無から逃れることなく、徹底的に無の底へと自らを同一化させ、無を「無効化」することだと言う。かくして虚無が底を尽くことは存在論的な転換であると同時に実存的な転換でもある。それが取りも直さず、純粹経験の「質料」的な内実として、この経験を具体化することなのだ、と語る。

そういえば、やはり禅の語録に次のような話があった。天台山の山中で道に迷った僧が、庵に到り、そこに住む法常和尚に道を尋ねた。「出山ノ路ハ什塵ノ処ニカ去ル。」法常答えて曰く、「流レニ随ッテ去レ。」〔景德伝燈録〕卷七
山中から抜け出る道を探ね、川の流れに沿って行けばよいという、ごく当たり前の応答なのだが、禅の語録には言外の意というものがある。法常は馬祖の法嗣だけあって、じつに「即心即仏」の境涯をみごとに表現している。空寂や虚無に囚われてはならぬ、むしろそれを「無効化」して、日常あるがままの経験の流れの真只中にいてこそ、「心」の在処を得るのだ、ということである。

（創文社 二〇〇七年）